

---

# 千年の恋をしよう

桂まゆ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

千年の恋をしよう

### 【Nコード】

N9602H

### 【作者名】

桂まゆ

### 【あらすじ】

人類が火星に移住を開始して、数十年。そこは、「偽物」だらけの星だった。その星に生まれたコウが求める真実とは？

プロローグ〈偽物だらけの星〉(前書き)

この作品は、「空想科学祭2009」参加作品です。

## プロローグ 偽物だらけの星

あれは、どなたの御代でしたか。

帝に仕える女官の中に、熱烈な寵愛を受けた女性がいました。

物語は、そこから始まります。

帝の寵愛を受けたのは、桐壺の更衣と呼ばれる美女。しかしこのべっぴんさん、致命的なまでに心が弱く。

他の女どもの妬みや恨み、えげつないまでの意地悪に、日に日にやつれて行きました。そして、ついには儂くなってしまったのです。美人薄命と悲しむべきか、弱肉強食を生き残れなかった心の弱さを哀れむべきか。

それでも桐壺の更衣は帝の子種を頂き、男の子をひとり産み落としておりました。

この御子がまた母親に似て、たいそうな美少年。成長するにつれ、ますます美しく育ちます。

これぞ、天下一の女たらし。

イケメンの草分け。

みやびやかなる、ケダモノ。

そう、かの有名なプレイボーイ、源氏の君でございます。

みやこの女性達はみな、源氏の君に夢中。ウインクひとつで、十人が卒倒してしまうありさまです

ここからは、後日談。

物語の中でついに源氏の君が亡くなってからも、世の女性の妄想は止まらず。

あれやこれやと、続編を書く始末。

枕を濡らしながら、悲恋の物語を読み、描き続けたのでござい  
ます。

それは、まじないが普通に行われていた頃。  
はるか、千年も昔の物語

今日も、夢の中の人はそんな話をおもしろおかしく聞かせてくれ  
た。

最近、よく見る夢だ。夢の中ではひとりの女性が、コウに話を聞  
かせてくれている。

四季折々の花が咲く庭があり、庭の真ん中には小川が流れていて、  
赤い橋がかかっている。

その人は、映像でしか見たことがない「和服」を着て、漆黒の髪  
を長く垂らし　まるで、時代劇の女の人のような格好をしている。  
夢の中でコウはその人の膝の上に座って、物語を聞いている。

それがどこかは、解らない。解るはずがない。

コウが生まれたこの星に、そんな場所は存在する筈がないのだけ  
ら。

コウ・サオトメは、ハイスクールに通う学生だ。火星生まれの火  
星育ちだと、育ての親である叔母が教えてくれた。

火星が地球人によって改造され、植民が始まったのは今からほん  
の三十年ほど前だ。惑星上に作られたドームの中で、人は地球に住  
んでいた頃と同じように生活をする。

火星には、大小様々なドームが存在するが、その中でもコウの住  
むD 4ドームに居住するのは日系人がほとんどだった。

元々、日系人は閉鎖的人種だという偏見の目で見られていた所に、  
この始末。「日本の猿は地球を出ても群れたがる」という失笑が必  
然としてわき起こったが　どんな陰口が聞こえようとも、D 4

ドームを訪れる日系移民は後を絶たなかった。そこには合理性を第一とする諸国の人に「無駄」で「無意味」だと呼ばれる、独特の「郷愁」があったから。

D 4ドームには、火星にはありえない、「四季」があった。もちろん偽物だ。見せかけに過ぎない。

例えば、ドームの天井に映し出される「空」に浮かぶ雲の形や空の色が、季節によって違う。

太陽暦の六月から七月にかけて、曇天が多かったり。「夏」には温度調整をわざと高く設定され、「冬」になれば低く設定される。

二月にはものすごく冷え込む日があり、やがてゆるやかに春が訪れる。

言い出せばきりが無い。とりあえず、本当に無意味な事に様々な趣向が凝らせてあるのだ。

快適な生活を手に入れながら、何故そのような無駄をするかと問われた時に、このドームの設計者は答えた。

「それが、生活のメリハリだ」と。

そんなD 4ドームでコウは生まれた。

火星生まれで十七歳のコウに、そんなメリハリや郷愁は必要ない。無駄で無意味だと思う。空の色も雲の形も、所詮は作り物に過ぎないのだから。

空も、緑も、四季も、ぜんぶ作り物、偽物だ。本物は、天文台から見えるあの「青い星」にしかない。

それでも、コウは夢に見る。

火星にはありえない、四季折々の花が咲く庭の情景を。

流れる水の音や、風鈴の音。虫の音、鳥の声。朝夕の公園で聞くことのできる「鳥の声」でも聞いた事がない、「テッペンカケタカ」と啼くのは、後で調べるとホトトギスの啼き声だった。

音つきの夢、しかも聞いたことがない鳥の声までついてる夢を見られるのは、火星では自分ぐらいのものじゃないかなと、実はコウは思っている。

コウは小さな頃に両親を亡くして、今は叔母に引き取られていた。だから、コウには両親の記憶はない。それどころか小さかった頃の記憶が、不思議なほど綺麗に、ない。

父親が死んだショックで、忘れてしまったのだと叔母に聞かされていた。

本当だろうか。

たまに、考える。

自分は火星生まれではなく、かつてあの青い星に住んでいたのではないかと。あの青い星が、自分にあんな夢を見せてくれるのではないのかと。

## 夢く遠い物語

「おっはよ、コウくん」

いつものように元気よく声をかけてきたのは、ユカリ・ミノ。ハイスクールの同級生だ。

ウェーブのかかった焦げ茶の髪が可愛い少女は、コウにとって「数多い友人」の中でも「本音を言い合える親友」のような存在だった。

二人の出会いを一言で表現すると、「あなたは！ 多分、知らない人」という台詞につきる。

入学式でユカリを初めて見た時に、既視感があった。無意識に手を挙げて挨拶をしかけ、「あ、やっぱり知らない子」だと気まずく手を下ろした時だ。向こうが、「ああ！」という顔をして、コウを見た。

次の台詞が「あなたは！」。その後しばらく硬直し、「多分知らない人……」と消え入りそうな声で、ユカリは言った。

初対面の女の子を相手に爆笑したのは、あれが初めてだ。

「ねえねえ、知ってる？ 富士山の名前の由来」  
得意げに、ユカリが話す。

火星には勿論、富士山はない。だが「火星富士」ならある。それはD 4ドームの象徴で、実は「火星富士」がある場所に、このドームは作られたのではないかと、コウは疑っている。

「富士は、『不死』だろ？ 不老長寿の妙薬をそこで燃やしたっていう言い伝えがある筈だよ」

普通に答えるコウに、ユカリは何故かふてくされた顔をした。

「何だよ？」

「別に」。コウくんって、『なんでそれを知ってるかな』ってことを知ってるよね？」

なるほど。

ユカリの目の下の隈に気づき、コウは苦笑する。勉強中に、コウが好きそうなネタを見つけたのだろう。

「古典では、ユカリには負ける気はしないな。あと、音楽も」  
不敵に笑い、彼女の最も苦手とする分野を指摘するコウに、ユカリはますます唇を尖らせる。

「はいはい。どうせ私は、学年きつての音痴でございですが、それが何か不都合でも？」

「別に、音痴でも生きていけないわけじゃなし」

「それは、フォローしてるつもり？」

はあと深い息をつく、ユカリ。

「待て待て、落ち込むな。芸術分野で僕に勝とうと思う方が間違っている」

「そこまで言うか」と、逆に笑みを浮かべるユカリ。

もちろん、コウが「そこまで」言えるのは、相手がユカリだからなのだが。

女の子って、みんなそうなんだろうか。ちょっとした事で、こころと表情を変えるユカリは、本当に一緒に居て飽きない。

「芸術分野だけじゃないでしょ。でも、古典は特に強いよね。なんか秘訣でもあるの？」

「ないし。それに、古典に強くても意味ないじゃないか」

今の時代、しかも火星で「日本文学」の「古典」に強くて何になるかと、コウ自身も思っている。

だが、何百年前の文学の中には、心惹かれる何かがあった。

だからだろうか。

夢の中で語られる物語は、いつも日本の古典だ。

そう、富士山が「不死」に繋がるのは、「かぐや姫」の物語。

かぐや姫と呼ばれる天女から授かった不死の霊薬を、時の帝は日本一高い山の上で燃やした。その時から、その山は「不死の山」と呼ばれる事になる。

物語は、そういう終わりかたをしていた。

( どうして、そんな大事なものを燃やしてしまったの？ )

幼いコウが尋ねると、その人は寂しげに告げる。

( 愛する人がいない永遠を、生きる事は辛いから )

愛する人がいない「永遠」。

それを想像すると、何故か心が痛くなった。

「コウくん？」

呼ばれて、はっと我に返る。

夢のことを考えているうちに、夢に引きずり込まれたような感じだ。どうかしている。

「疲れてる？」

ユカリが心配そうな顔で尋ねる。コウは笑って首を振った。

夢の話なんか、出来るわけがない。馬鹿にされるのがオチだ。

「そっちこそ、目の下に熊が寝てるけど？」

「うるさい。こっちはコウくんみたいな秀才じゃないんだから、授業についていくのに必死なのよ」

ユカリが右手の拳を突き出し、軽くコウの肩のあたりを叩く。柔らかな髪がふわりと広がった。

そんな彼女の可愛いしぐさに、何だかほっとする。

夢はあくまで、夢でしかない。ここは火星のドームの中。そして、自分は当たり前前に学校に通う、ただの学生なのだから。

「お帰り、コウ」

叔母の住居でコウを出迎えてくれるのは、メイドロボットのエミリ。

このメイドロボットも、物心ついた頃からコウにとっては友達だった。

エミリは、ロボットのくせに人間のようだ。家事の腕はもとより、相手の話を聞くのが上手で 相づちの打ち方が、絶妙だとコウは思う それに、他の友人の家にあるメイドロボットみたいに「融通がきかない」事もない。

後で聞くと、設計者はロボット工学の権威だと言われた、早乙女裕樹博士。

叔母の兄で、コウの父親だ。

映像でしか知らない父親は、厳格な顔をした年輩の男性だった。コウとは全然似ていない。

その博士が設計したロボットを叔母は大切にしていたが、少し前までは「エミリは『お友達』ではないのよ」と事あるごとに言われた。「人間のお友達と遊びなさい」だとか「相談は、人間相手にしなさい」だとか、しつこい程に。

エミリは所詮、ロボットなのだから、と。

そんな叔母は医学博士で、昼間は仕事、夜は遅くまで研究を続けていた。だから、この叔母と顔を合わすのは夕食の時くらい。しかし、叔母がその時間を自分の為に作ってくれている事は、コウだっ  
て知っている。

そう、一時期「人間嫌い」だったコウの為に、叔母が作ってくれた語らいの時間だった。

「何だか、今日は浮かない顔だね。少年よ」

おどけた口調で語りかける、叔母。叔母と二人で（正確にはメイドロボットエミリと三人で）生活を始めて長いが、実はこの叔母の事はコウにはよく解らない。

たまに、ものすごく色々なことを考えていたり、たまにものすごく豪快であったり。

どうして結婚しなかったのかとか、聞いてみたいが聞くのが怖い。「学校で、何かあった？」

さらに問いかける、叔母。夢の事は、彼女にも言えない。病院に強制連行されるような気がするから。

だから、コウは別の事を口にした。

「ずっと、考えてるんだ。この星に、ほんとう真実つてあるのかな？」

立体映像を駆使した公園。空の色、雲の形、四季の温度差にまで気を配る、D 4ドーム。でもそれは、偽物に過ぎない。ともすれ

ば、夢で見る景色のほうがよほど、「本物」に近いような気がする。尋ねられた叔母は、きょとんとした顔をしてコウを見て、それから吹き出した。

「言わなきゃ良かった」とわざと聞こえるように呟く。本当は、心のどこかで解っていた。そんな反応があるであろう事は。

「ごめんごめん。では、答えてしんぜましょう。此処に本当はあるのかと問う、キミのその質問の中にこそ、真理がある」

叔母さんの返事は、まるで謎かけだ。

「何？ わけがわからない」

「悩み、考え、自ら真理を求めたまえ、少年よ。さすれば道は開かれん」

そう言っただけは、にやりと笑う。

「それにしても、やっぱりコウは兄さんの息子だね。言う事がそっくりだ」

そこまで言っただけは叔母は時計にちらりと目をやり、残っていた料理をかたづけようエミリに指示を出す。

「父さんが、何なのさ？」

「惜しい、タイムオーバー」

いつものように、叔母は二十時きっかりに食事を終えた。

「何にせよ、さっきの答えは自分で見つけなきゃ意味がない。がんばれ、少年」

そう言っただけは、豪快に笑いながら部屋を出る、叔母。

なんだかいつも、両親の事を聞こうとしたらはぐらかされるような気がする。確かに忙しい人には違いないのだが。

両親。映像でしか知らない父親と、映像さえも残っていない、母親。

実は、例の夢を見始めた原因は、解っている。

父親の遺品整理中に見つけた、マイクロディスク。そこには、「キリカの読み聞かせタイム」というデータが入っていた。

再生すると、ひとりの女性の立体映像が、綺麗な声で朗読をしていた。

「いずれの御時にか」で始まる、源氏物語。

「いまは昔、竹取の翁といふものありけり」で始まる竹取物語など。

古文で冒頭だけを読み、次に現代文で解説をしてくれる。だが、その解説が無茶苦茶で。「なんだこれ」と笑えるようなものだった。例えば、あの有名な『若紫』の冒頭。

何の因果か、源氏は病に倒れてしまいました。あれこれと手をつくしてみますが、医者がヤブなのかまじない師がインチキなのか、いっこうに効果がありません。

見かねた知人が、「北山のなにがしという寺に、たいへん高名な僧がおります。その方に来ていただいてはどうでしょう?」と、教えてくれました。早速、その僧を呼び寄せようと手紙を使わします。

ところが、返事は「そらあさん無茶苦茶ですがな。この足腰もよう立たん年寄りに、都に来いとはなんちゅう無体な。途中でぼっくり行つてしもたらどうしてくれますのんや。あなたさんの方からおこしなはれ」とのこと。源氏は「どうして自分ともあるう者が、男の所に通わなければらなんのだ」とは思いながらも、しぶしぶ重い腰を上げ、その寺に行くことになりました。

流れるように無茶苦茶な意識を語る、美しい女性。その語りが本当に楽しそうだったので、見ているコウも自然と笑ってしまった。

夢を見るようになったのは、その直後から。

女の顔は、夢で見る彼女にそっくりだった。そして、今になって思えば、コウにもよく似ている。だったら、もしかしなくても。

お話をして。

そうお願いするコウに、女が腕を組んで考える。

(じゃあ、今日も源氏の君の恋物語をしましょうね)

(源氏の君はいつものように恋に落ちます。でも、この女性はとて

も身分の高い方でした。周りの反対を押し切り、愛し合った二人は、手に手をとって逃げました)

(逃げる二人の後を、鬼が追っています。二人は気づかず、ある小川のほとりに出ました)

(そこには、小さな花がつぼみをつけておりました。花に浮いた露を見て、女が感嘆の声を上げます。『なんとうつくしい。あれが、真珠というものですか?』)

(でも、源氏の君は答えるができませんでした。不意に日が陰り、雨が降り始め、雷まで鳴り始めてしまったのです)

「どうなったの?」と、コウが聞く。

(雨宿りをする間に、女は鬼に連れて行かれてしまい、源氏は涙にくれます。『あれが、真珠ですかとあなたが聞いた時に、露と答えれば二人で消える事ができたのでしょうか』と)

今のコウは、知っている。それは「源氏物語」ではない。別の物語の一部だ。

そういえばあの人の物語は、たまに無茶苦茶な時がある。だからこそ、面白いのだが。

だから、夢の中で突っ込む。

(それ、伊勢物語だろ? 「芥川」じゃないか)

女は驚いたようにコウを見て、そうして笑った。

(さすが、わたしの源氏)

## 源氏く六条院

目が覚めて、呆然とする。

源氏。

そう呼ばれたのは、初めてではない。そんな気がする。  
おかしい。どうかしている。

生きた花の咲く庭、虫の音、鳥の声。小川のせせらぎ。

そんなものは、火星にはない。そんなものを、コウが知っている  
筈がない。

だったら、どうしてこんな夢を頻繁に見る？

あのディスクに入っていた女性は、誰？

そんなの、ひとりしか思いつかない。顔も覚えていない、写真の  
一枚、映像ひとつ残されていない。

コウにそっくりな女。名前が「キリカ」なら、それはコウの母親  
に違いない。

では、夢の中の館でコウを「源氏」と呼ぶのは誰？ 母親と同じ  
顔をして、めちやくちやな物語を語るのは。

どうして、母親の物が何も残っていないのか。どうしてコウには  
幼い頃の記憶がないのか。

今まで、それが普通だと思っていた。それ以上、考えることもな  
かった。それがどうして今になって、こんなにも不安になるのか。

「コウくん？」

心配そうなユカリの声に、我にかえる。

考え事に沈んでいて、いつの間に学校に来ていたのかも覚えてい  
ない。

「悩み事があるなら、相談してみない？」

「私じゃ、頼りにならないかもだけど」と、寂しく笑う、ユカリ。

コウは目を伏せ、小さく首を振る。どこから話せば良いのか、実は  
コウにもよく解らない。

「ユカリ、地球には行った事ある？」

「あるわけないじゃん」

即答した後で、ユカリはもう一度コウの目を覗き込んだ。

「ごめん、地球がどうしたの？」

「夢を、見るんだ」

夢、と。ユカリが呟く。

「庭には花が咲いて、小川が流れていて。夏には蝉が鳴いて、秋になると虫の音だって聞こえる」

ユカリは、答えなかった。

コウの言葉を反芻し、何かを考えている。

「何度もなんども、そんな夢を見る。ばかみたいだろ？ そんな場所、火星にあるわけがないのに」

「あるよ」

はじめられたように、コウはユカリを見た。ユカリは笑っていない、ただじつとコウを見つめている。

それは、初めて見る顔だった。

戸惑い、恐れ、不安。そんなものが凝縮された、ユカリの眼。

「あるって、何処に？」

ユカリの豹変と、何より「あるよ」というその言葉にコウは驚いていた。

「何処に？」

繰り返す声が、震える。

「ごめん。よく覚えてない。確か建設中止になったテーマパークのアトラクションの一部だけ公開されるって……招待メールが来て、そこで私は男の子と会った」

ユカリの視線は、コウから離れない。まるで、初めてコウを見たように、じつと見つめている。

「その子ね、アトラクションの案内ロボットと一緒にいたの。だからつきりその子もロボットだと思いこんでいたの。アトラクションのひとつだって」

アトラクション？ ロボット？ 真実に近づいたかに見えた何か  
が、コウの手元からするりとすり抜けたような、妙な空虚感があ  
った。

その間にユカリの指が、コウの手に触れる。つねられた。

「いきなり、何をするんだよ」

「うんうん、生きてるね」

ユカリは、何故かほっとしているように、笑った。

「その子ね、案内ロボットに、ゲンジって呼ばれていた」

「源氏？」

再び、コウが固まる。それは、今朝見た夢の台詞だ。

ユカリまで、夢の住人なのか？ 軽く、混乱する。

「コウ君に初めて会った時にね、すごいデジャヴがあつて。なんだ  
つたかなってずーっと考えていた。でも、コウくんがあの時、あそ  
こに居た子供だったら、繋がらない？」

「繋がる？」

「コウくん和我、ずっと前に一度会った事があるんだよ。あの場所  
で」

そう言つと、ユカリが少し照れたように目をそむけた。

「なんだよ？」

「なんでもない。ちょっと、嬉しかっただけ。小さい頃のコウくん、  
可愛かったし。でも、どうして今まで言ってくれなかったの？」

「だから、僕のは夢だつて」

夢、ともう一度ユカリが呟く。

そうだ、ユカリにとっては「思い出」かもしれない。だがコウに  
はそんな記憶はない。コウのそれは「夢」でしかない。

「調べられるかな。その場所。ユカリ、手伝ってくれる？」

コウの言葉に、ユカリは嬉しそくに頷いた。

七年も前のメールを、ユカリは残していなかった。

だが、サーバーには残されている可能性がある。

ユカリ宛てに送信されたメールの記録を呼び出す。これは、かなり面倒な作業だったが、七年ほど前と解っているので数をこなせば先はいずれ見えて来る。

「出た。『貴女を「六条院」に招待します』これだ」

モニターには庭園の静止画が浮かんでいる。その静止画は確かにコウの記憶に残る庭園と酷似していた。

「招待主は？」

「アトラクション案内人、藤壺。そうそう、変な名前だからいたずらかなって思ったんだった」

アトラクションの設計者の名前もそこには表記されている。Y・サオトメ及びK・ワカミヤ。

ユウキ・サオトメはコウの父親の名前だ。ワカミヤは解らないが、Kならキリカの可能性がある。

そう言っていると、ユカリが不満そうな目でコウを見た。

「もしかして、最初から自分の両親関係だと思っていた？ だったら、叔母さんに聞いたら良かったんじゃないの？」

それは、コウも考えていた。

だが、彼女は「その答えはコウ自身が見つけないと意味がない」と言わなかったか？

そういう事なのだろうと、解釈する。

「そのアトラクション、まだ公開されてるのかな？」

「ちよっと待って」

ユカリが「六条院」に自分の市民IDでアクセスすると、すぐに

『六条院はユカリ・ミノノの来訪を心待ちにしています』というメッセージが出て、来訪日と目的、同行者などの入力画面が続いた。

ユカリに促され、コウもそこに自分の市民IDを入力する。

『六条院は、早乙女 光の来訪を心待ちにしています』  
やったと、ユカリが拳を握って小さく叫んだ。

「コウくんって、『光』っ書いてコウだったのね」

火星ではほとんど使われる事がない名前の漢字表記に、ユカリは

すこし嬉しげだ。

「僕も初めて知ったんだけど、何で僕だけ漢字表記なんだろう」

「ちなみに私は、御園……ちょっと、コウくん聞いている？」

勿論、聞いていない。コウは改めて役所に接続しなおし、自分の市民IDで市民データを呼び出した。

KO SAOTOMEの隣に、小さく漢字表記された名前。そこには「早乙女 孝」と書かれていた。

悩んでいても、はじまらない。

コウは叔母さんには「友達と鼠王国」に行くと言っていて、シャトル乗り場に行った。

ちなみに鼠王国とはD 4ドームにほど近い小さなドームで、流行のテーマパークのひとつだ。コンセプトは「夢と冒険の世界へようこそ」。ハイスクールに通う学生なら、友達と一泊二泊程度で遊びに行くにはうってつけの場所だった。それこそ、偽物だらけの世界だけど。ここまでやってくれるなら、それもアリかなというのが、コウの感想だ。

だが、今回の本当の行き先はその鼠王国ではない。

いやおうなしに高ぶる興奮の行き着いた先。専用シャトルで到着したそこは、ドームの形をした廃墟に見えた。

開発中止となったテーマパークと言われて、なるほどと思う。作りかけ、壊すにも経費があるのでそのまま朽ちるに任せた残骸達がそこに残されていた。

そんな中を通り過ぎ、シャトルは発着場に停車する。

発着ゲートをくぐると同時に、かぐわしい香のにおいが鼻をくすぐった。

そして。

「ようこそ、いらつしやいませ」

と、迎えてくれたのは和服を着て、後ろ髪を長く垂らした若い女性。いや、よく見れば解る。それは、ロボットだ。

面立ちは、夢に見たあの人そのまま。

「わたくしは案内人の『花散里』と申します。六条院は、ユカリ・ミノノ様、ヒカル・サオトメ様のご来訪を心より歓迎致します」  
違う。

「僕は、ヒカルじゃない。コウだ」

言われた女はコウを見て、深く頭を下げた。

「登録にミスがあったようです。ご不快な思いをさせ、たいへん申し訳ありません。早急に訂正致します」

違う。改めて、そう思う。

あの人は、こんな機械的な物言いはしなかった。

これでは、エミリのほうがよほど人間っぽい。そう、考えてコウは苦笑する。

所詮、ロボットなのに。ロボットに何を期待していたのだろう。

「この案内人って、前からあなただった？ 『花散里』」

コウの落胆を察したように、ユカリが尋ねる。

「以前の案内人は初期化されました。現在は私が案内人です」

あらかじめ、予測された質問に対する答えを選び出し、的確に使用する。ロボットのありべき姿だ。だったらと、コウもそれに見合う質問を投げかける。

「その以前の案内人の名前も、『花散里』だったのかな？」

「『藤壺』だと、記録されております」

顔色を変えることもなく、『花散里』は答える。では、かつてユカリを招待したのはロボットだったのか？ ロボットの一存でそんなことが、出来るのだろうか。

「どうして、『藤壺』は初期化されたの？」

ユカリの質問への答えは、コウが想像した通り「そのデータは残っておりません」だった。

あらかじめ入力された内容以外の事には答えられない。元来ロボットとは、そういうものだ。

エミリや夢で見た 『藤壺』が、特別なのだろう。

「それでは、六条院をご案内いたします。六条院の見所は、流れる水と四季の折々の花の世界です。現在は太陽暦の十月、庭園の萩や桔梗が見頃です。そうそう、こちらでは珍しいフジバカマも生息しておりますので、ぜひ何か珍しい植物がございましたらお尋ね下さい」

『花散里』は優雅に会釈をすると、ゆっくりと歩き出す。

その動きはロボットには思えない　たおやかというのだろうか。それとも、みやびやか？

コウが今までに見たムービーの中にすらない、優雅な仕草だった。

笑う時に着物の袖をそつと口元に当てる、『花散里』。

見えるのは目だけなのに、その仕草で微笑んでいるのが解る。

精巧な、ロボット。そして、彼女が案内するのは、確かに生きている庭。

そこに咲くのは、火星で自生することは有り得ない、本物の花だ。ドーム一個をまかなえるぐらいの地下水が、この建物と庭の為に使われているのだと『花散里』が教えてくれた。

地下水を循環させ、大気を作り、植物を育てる。それだけの可能性がある土地を、「火山帯に近い」という理由で政府は見捨てた。

「おかげで、訪れる人も少なく。お二人は久し振りの来訪者です。どうぞ、ゆっくりおくつろぎ下さい」

ゆっくりとくつろげと言われても、眠れるわけがない。

布団を通して感じる畳の感触に、コウは意味もなく寝返りを繰り返す。

障子に面する庭から、香の匂いとは違う花の香が漂っていた。

リンリンと啼くのは、鈴虫だと聞いた。

いや、違う。

虫は啼かない。なぜなら虫には声帯がない。羽を摺り合わせたり腹膜を振るわせたりして、音を出すのだ。だから虫の声じゃなくて虫の音と言つのが正しい。

そんなことを、説明してくれたのも、あの人だったような気がする。

「コウくん、寝た？」

障子ごしの声に、

「起きてるよ」

と、コウが答える。

「入って良い？」

返事を聞くこともせず、浴衣姿のユカリが部屋に入って来た。

「似合ってるでしょ？」

「まあ……そうだね」

「どうして、そこで言葉を濁すかなあ」

むくれるユカリが可愛いからだとは、あえて言わない。

「眠れない？」

言われて、ユカリが素直に頷く。

「あ、でも別に怖いんじゃないよ。ベッドじゃないから、寝付けなくて」

そう言っ、ユカリがそっとコウの隣に身体を横たえた。

「ちよつと待てよ」と慌てて布団を出るコウに、

「手を出したら、死刑」

ユカリが言う。

「出すか、馬鹿」

「馬鹿っていう奴が馬鹿なんだよ」

まるで、幼稚園児の問答だ。

布団を取られてしまったので、仕方なくコウは少し離れた場所に座布団を並べて丸くなる。

あの人は、もういない。同じ姿をしていても、『花散里』はコウの思い出に残るその人ではない。

偽物だらけのこの星で、唯一、ほんとうだと思っていた。

それも全部、作り物だった。

歪んだ世界。歪みきった、場所。

そして。

その中心に居る筈だったその人が、いない。  
どうして？

彼女が一体、何をしたというのだろう。

「ずっと考えていたんだけど」

コウに背を向けたまま、ユカリが呟く。

「此処が何なのか。知っているのは叔母さんじゃないの？」

「だけど、叔母さんは自分で答えを出せって言ったから」

コウも小さな声で答える。それが言い訳だと解っていたから。

「どうして、それで納得するのよ。小さい頃の記憶がないって、す

ごく異常な事なんだよ」

少し、怒ったように告げる、ユカリ。

だから。

コウは、その言葉を口にした。やっと、口に出ることが出来た。

「僕は、本当に人間なのかな……」

振り返ると、ユカリがコウを睨んでいた。

「当たり前でしょう。お馬鹿」

いつも通りのユカリの反応に安心して、コウは目を閉じた。

## 千年の恋〜エピソード

(雷が激しく鳴り響き、雨もひときわ激しく振ります)

(源氏の君は、女性を蔵に隠し、弓を持って女を守っておりました)  
だから、それは源氏物語じゃない。伊勢物語だ。

(良く気づいたわね。さすが、源氏)

コウは飛び起きる。

激しい轟音が、そして、それに続いたユカリの悲鳴が彼の目を覚まさせた。

「ユカリ、大丈夫?」

「あんまり、大丈夫じゃない」

背後からしがみつかれた。震える声が、頭の真後ろで聞こえる。

「なに、これ?」

火星に生まれたコウは、もちろん「雷」を知らない。ユカリだつてそつだ。

「コウさま、ユカリさま」

『花散里』の声が、障子の向こうから聞こえてきた。

「『花散里』、やっぱりどつか壊れたの?」

涙声で、ユカリが尋ねる。

「ああ、驚かせてしまい、申し訳ありません。『神鳴り』の設定をオフにするのを忘れておりました。今のは、この館の住民に外からのアクセスを知らせる合図です」

外部からのアクセス? その度にいちいちあの音が鳴っていたら、うるさくてかなわない。

そんな事を考えるコウに、『花散里』が告げる。

「コウさまに、アオイ・サオトメさまからメッセージが届いております。今、受け取られますか?」

アオイ・サオトメは、叔母さんの事だ。

コウが頷くと『花散里』はメッセージを再生した。

『コウへ』

叔母の声音は、いつも食事中に聞くそれと、何も変わらない。ここにメッセージが送られて来たということは、彼女の中にも何かしらのことがあった筈なのに。

『あなたがそこにいるということは、自分の考えで行動し、真実に近づいたと言うことでしょうか。ならば、私も私の知る事実を、あなたに真実を告げるべきだと思います。まずは、この録音を聞いて下さい』

叔母の声が途切れると、ノイズに混じって別の女の声が聞こえてきた。

『あれは  いつの頃でしょうか。様々な美女や、才能を持つ人々が集う中で、ただひとり。とりたてた才能もないのに、彼の愛を受けた女性がありました』

それは、コウが聞き慣れた声だった。

『私の名は、『藤壺』といます。早乙女教授によって作られ、そう名付けられたロボットです。』

今から私は自分の罪を告白致します。

でも、その前に私が何故このような罪を犯したのか。そのきっかけを聞いて頂きたいのです。

早乙女裕樹博士は、とても優秀な方でした。様々な美女や、才能に溢れた人々が、いつも彼を取り巻いております。その中で彼の愛を受けたのは、とりたてて目立つこともなければ秀でた才能もないひとりの学生でした。

若宮キリカはもっぱら古典の研究をする学生で、趣味で古典物語の編纂などもやっております。彼女の所属する大学の名誉教授であった早乙女博士は、彼女の自作VTRを見て彼女に惹かれます。

早乙女博士は、とあるプロジェクトの為に火星に移住することが決まっていました。キリカに自分と結婚して共に火星に移るよう、告げます。

火星に移転した二人は、それはそれは幸せでした。研究を中挫す

ることになったキリカはこの星に生まれる子供達に、大昔の地球の物語を読み聞かせることを決めます。その中には、自分の未来の子供も居る筈でした。

でも、その幸せは長く続きませんでした。適性検査に不具合があり、キリカの身体が火星に適応出来ない事が解ったからです。

二人は何度も相談して。

それでも、結論は出ません。日に日に、キリカは弱って行きます。早乙女博士が所属する新しいドームのプロジェクトが、中止になったのはそんな時でした。

だったら、地球に帰ろう。

二人が結論を出した時には、遅すぎました。

キリカの体は、星間移動を出来ない程に弱っていたのです。

早乙女は、建設中止になったドームを開発プロジェクトチームの権限を使って買い取りました。

そして、そこにキリカが夢に見た御殿を造って、二人で最後の時を過ごす事に決めたのです。

キリカがずっと研究していた、「源氏物語」の世界を。

早乙女の夢は、かないませんでした。

キリカは御殿の完成を見ずに死んでしまいました。

「六条院」を完成させた早乙女は、彼の妹が持っていたキリカの卵子を使ってひとりの子供を……つくりました。

子供は「ヒカル」と名付けられ、彼を育てる為に乳母ロボットが作られました。

それが、私です。

キリカとの思い出と、キリカの姿を、博士は私に移しました。

それから、私たちは三人である「六条院」で生きていました。まるで、早乙女とキリカが夢見た世界を再現するように。

早乙女が、亡くなるまでは。

早乙女が亡くなる時に言った台詞を再現します。

「私はキリカに、約束した。君の未来を奪った事と引換に、千年の

記憶に残る恋をしよう。君が愛した、物語のように。この場所は、二人の誓いの証。お前はその守人だ。だが、ヒカルは……あの子を巻き込んだことは、私のエゴに過ぎない。あの子にはその名に恥じない光あふれる未来を生きて欲しいと思っている」

早乙女は、彼が亡くなった後で源氏を　ヒカルをアオイさまに預けるよう、指示を残して逝きました。

でも、その命令を私は実行しませんでした。

キリカの記憶を移された私は、いつしか早乙女にロボットにはない筈の感情を持っておりました。

愛する人のいない永遠を、ひとりきりで過ごす事が、私にはできなかったのです。

早乙女が亡くなった後、五年もの間、源氏を手元に置きました。

まるで生き急ぐかのように大きくなる源氏を見て、自分の罪に気が付くまで。

私は、ひとりの少女を『六条院』に招きました。アオイ様に報告をする前に、最後の夢が見たかった。

そう、源氏が『六条院』で恋をするという、夢を。

私は、罪を犯しました。処分されるのですね？　では、最後  
にお願いを。

早乙女博士の遺言だけは、どうか叶えていただけますように』

「なんだよ、それ」

『藤壺』の告白を聞き終え、コウがぽつりと呟く。

永遠に、循環する水や大気。庭には四季の花を咲かせ、管理をするのは永遠の命を持つ管理者。

ここは、父の夢の御殿。

その、なんとといういびつなことが。

「ばかみたいだ」

自然に、拳が硬く握りしめられる。

「ばかみたいだ。じゃあ、ここはまるで……」

「お墓」

と、ユカリがコウの言葉を引き取る。

「二人の、メモリアルパークだったのね。ここは」

そのメモリアルパークの管理人として作られたロボットは、狂った。狂ったロボットが処分されるのは、当然のこと。

『以上が、「藤壺」の告白です』

冷静な叔母の声が、流れる。

『あなたの部屋で、キリカのディスクを見つけた時から、こんな日が来る事は解っていました。』

最初に、謝るべき事は謝っておきたいと思います。

私は、あなたの存在を長い間知りませんでした。保存しておいたキリカの卵が無くなっていた事も、『藤壺』の告白を聞くまで気が付いていませんでした。

兄もまた、キリカを亡くしたことでどこかおかしくなっていたのでしょうか。彼の愛の深さだと思っただければと、思います。

あなたに謝りたいのは。

あなたの両親が与えてくれた「光」という名を勝手に「孝」に変えてしまった事。

そして、子供の為にならない記憶を削除するという決定に、従った事。

そこは、あなたにとって本当に歪んだ場所だと私は思います。だから、あなたの記憶に残したくなかった。人間嫌いだった頃のあなたに、戻って欲しくなかった。

でもね、コウ。

歪んでいても、偽物であっても。

ひとりよがりであっても、大馬鹿野郎であっても。

私はなぜか、そこで死んだ兄やキリカを「天晴れ」だと思うのです。よくもまあ、そこまで自分の信じた愛を貫いたものだなあと。

本当に呆れるぐらいロマンチストなふたりを、とても馬鹿だと思い、誇りに思います。

この意見についての不平不満は、家で聞きます。

さて。

「ここでひとつ問題があります。

うちの家訓、覚えている？ そう、「秘密は良いけど嘘はつくな」  
だったよね？

覚悟を決めて帰られる事を、心待ちにしております。

あなたを愛する、叔母より』

メッセージは、そこで終わる。

「叔母さん……」

コウは軽く額を押さえた。

なんで、こんなに豪快なんだ。

てつきり『藤壺』に続く懺悔を聞かされると思っていたのに。

「天晴れ」で「大馬鹿野郎」。なるほど、言われてみれば確かに  
そうかもしれない。

「帰ろうか」

コウが呟く。

「そうだね」

ユカリが、普通に笑った。

だから。

そっと、その肩を抱いた。

「ありがとう」

告げたコウの言葉は、「何をするかああ！」というユカリの叫び  
にかき消されたが。

(愛する人がいない永遠を、生きる事は辛いから)

そう彼女が語ったドームがやがて地平線に消えていく。

二人の乗るシャトルは、まもなくD 4ドームに戻る。

「綺麗な場所だったね。六条院」

ユカリが彼方を見ながら、呟いた。

「綺麗だけど、なんだか悲しい場所だった」

「形にこだわるのは、人間だけだよ」

答えるコウに「そうだね」と相づちをうつ、ユカリ。

形にこだわり、時間に急かされるのは、いつも人間だけ。

生まれるまでには何億年も必要な星の上で、たかだか、生まれて数万年ほどで、ここまで劇的な進化をしたものなんか、人類ぐらいのものだろう。

千年をして「永遠」と呼ぶのも、また。

もちろん、コウだって人間だ。体外受精など、火星では珍しい事でもない。

だから。「千年の恋をしよう」なんて言える相手がもしも側にいたら、それはとても幸せな事かも知れないと、思う。

「千年の恋をしよう、か」

ふいに、ユカリがぽつりと言う。

「な、何だよいきなり」

何故か焦ってそのふわふわの髪から顔をそむける、コウ。

「言われてみたいな、そういう台詞」

「誰に？」

意地悪と、ユカリが小声で呟く。

シャトルは、高速で飛ぶ。もうすぐ、彼等の家のあるD 4ドームにたどり着く。

コウの両親は、未来になにかの形を残そうとした。一見、贅をつくしたように見えるあの宮殿は、言い換えればそこにある資源を生かせなかったものの残骸から出来ている。

どちらが正しいのかを判断するのは、とりあえずコウではない。

ここは、地球ではない。

宇宙規模で考えれば、千年なんてほんの一瞬。星の、一瞬の煌めきに過ぎない。

あの青い星から離れた自分達は、千年後には何処にいるのだろう。火星からも離れて、はるか地球を遠ざかっているのだろうか。

そんな未来に、もしも何かを残せるのなら。

僕らも、恋をしよう。

千年の時を経て語り継がれて来た、物語のように。

## 千年の恋〜エビローグ（後書き）

書き終えて。

「SF?」と、聞かれて、はっきり「はい、SFです」と言い切れないあたり……。

（コホン）描こうとしていたのは、スペースロマン。

何かが違つと、何度も終盤を書き直しました。

四回書き直して、解つた。

主人公をお母さんにしたらよかつたんだ！

間に合いません……（涙）

読んでいただき、ありがとうございました。

スペースロマンって、難しいですね……。

かじゅぶ様が、作品の「表紙」を作つて下さいました。

火星と、掌の上の「六条院」とても幻想的で繊細な作品です。すごく嬉しかったので早速小説TOPに貼りました。

おお、なんと小説が立派に見えることか！ かじゅぶ様、大感謝です。本当にありがとうございました。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9602h/>

---

千年の恋をしよう

2010年10月8日14時51分発行